

馬寮に統合されたものといえよう。

このように奈良時代末に設置された内廐，主馬両寮は大同3年（808）に廃され，もとの左右馬寮が復活するのである。上述のとおり，主馬，内廐と墨書された土器の発見によって，奈良時代末には，両寮がこの地域に存在したことが確定的であるし，発見遺構の重複関係から奈良時代を通じて同規模の官司が存在していたことが判明する。平安宮古図によれば，おおよそそのところ宮城西方の位置に左右馬寮があり，発掘調査による官衙の位置もほぼこれと一致している。

第72次調査

第72次調査は，昨年度におこなった第69次発掘調査を継続し，この地区の理解をさらに高める意図のもとに実施した。発掘区の設定は2ヶ所でおこない，その1は第69次調査であきらかになった正殿建物の北後方地域（6ABP-F・G地区），その2は第69次調査地区の南前方地域（6ABQ-C地区）である。

6ABP-F・G地区は朱雀門中心線の北方延長上にあたり，佐紀丘陵末端の台地上に位置する。

6ABQ-C地区は台地の南裾部で，朱雀門中心線の東側にあたる。

発掘面積は6ABP地区2170㎡，6ABQ地区1750㎡である。

発掘した遺構についての記述は6ABP地区と6ABQ地区にわけておこなう。

6ABP-F・G地区

検出された主な遺構は建物8棟，塀8条，溝10条などで，およそA・B・C・三つの時期にわけることができる。それらは第69次調査の時期区分A・B・C.と一致する。ただ69次調査で存在したD期の遺構は今回検出されなかった。

A 期

B期造営の際にかなり大規模な削平・整地が行われたためか、A期に属する遺構の残存状態は極めて良くない。確実にA期と認定できる遺構は、わずかに溝SD7165、7167が存在するのみである。

SD7165は発掘区中央北よりに位置する特異な溝状遺構であり、三ヶ所で溝を北に屈曲させ凸字状の張り出し部をつくっている。張り出しの位置は中軸線上及び中軸線から東西に15mの地点であるが、西側の張り出しは一部を検出したのみである。東張り出し部では東辺がそのまま南へ伸びていることを確認した。

この溝は深さ5～20cm程度の浅い溝で、底に高低差が著しく、水を流した溝とは考えにくい。また、南辺及び東張り出し部付近では溝の壁が殆ど垂直に立ちあがった状態で残存しており、おそらく凝灰岩等の切石を抜きとった痕と考えられる。このことは、SD7165の三ヶ所の張り出しが建物の北面階段の痕跡である可能性を示しており、SD7165を北限とするかなり大規模な基壇建物の存在を想定することができる。

この他、発掘区の南辺近くに東西溝SD7167がある。SD7167では張り出しの存在を確認していないが、溝の堀り方、埋土の状況等、SD7165と共通する点も多い。これがSD7165と対応してA期の中心的殿舎の南を限るものになるかどうか、ただちに断定はできない。

この地域では、第69次調査で、木製階段SX6601、磚積みの段SX6600、建物SB6605等の遺構が検出されていた。

SX6600は、台地南端の地山を削りとして設置された磚積みの段落であり、その基底部は、この一郭を囲む築地回廊内を南北に3等分した線上にのっている。これによって画された北方の台上には前殿風建物としてSB6605（この建物も柱堀り方が浅く、礎石建物になる可能性がある）を配している。さらに今回、その背後に正殿風基壇建物の存在を想定することができたわけである。

B 期

敷地内を10尺方眼地割とし、その地割にしたがって極めて規則的に建物を

配置した大規模な造営の時期である。またこの時期にはA期の構築面を削平し、台地を南に拡張している。発掘した遺構は建物5棟、塀3条、溝3条等である。

建物は、69次調査で検出した正殿SB6610のすぐ北に接してSB7150、さらにその背後に各々6mの距離をおいて後殿SB7151、7152を配置する。

SB7150は7×3間の身舎の四面に廂をつけた東西棟であり、身舎東から三間めの柱通りに間仕切りを設けている。さらに身舎の北から一間めの柱通りには深さ5～10cm程の浅い小掘り方列がある。これを東柱とすれば、構造上この南3mの柱筋にも東柱列を必要とするが、現存東柱穴の浅さからみて削平されているのかも知れない。

この建物とSB6610との関係については、両者が東西軒廊で接続するか、あるいはSB6610が2棟に分かれ、都合3棟が並び堂風に軒を接する場合が考えられるが、現在のところいずれとも決し難い。

後殿SB7151は、SB7150の北側柱列から北へ20尺隔てて建てられた9×2間の東西棟であり、69次調査で検出した東第四殿の西に並ぶ。この建物は後(B期のうち)に廃絶し、同じ位置に「コ」字状の目隠し塀SA7178、7179、7180がつくられる。目隠し塀はSB7151より全体にやや南へずらされ、10尺方眼にはのらない。

SB7151の北20尺離れた位置にSB7152がある。やはり9×2間の東西棟で、SB7151と全く同規模の建物である。同じく東第五殿に柱筋を揃えている。またこの建物には東第五殿と同様、東から三間めに間仕切りが設けられている。

SB7152の北及び西側には素掘りの雨落溝SD7162、7163がある。

正殿風建物SB7150の東には東第七殿が置かれるが、この建物SB6650の西半部は今回の調査で検出されたものである。3×3間の平面で、南側中央間には1×1間の突出部が付属し、開口施設と考えられる。SB6650の柱間は南北10尺、東西12尺となっている。この東西柱間の寸

法がSB7150とSB6663の間の距離60尺を東西に5等分したものであることは既に前回の調査で指摘されていたが、今回調査によって再確認した。

SB7150の西には東第七殿に対応すると思われる西脇殿SB7155がある。今回東西2間分、南北1間分しか検出していないが、東から2間めの柱間が15尺となり、東第七殿と異った様相を呈している点は注目される。

この時期の中央建物群（SB7150、7151、7152）から東10尺の位置には前回調査分の延長として石敷溝SD6608が南流している。SD6608は北方でかなり削平を受け、SB7152の北側雨落溝SD7163につながるかどうか確認し得なかった。この溝の時期について、前回調査時にはC期に比定されていたが、溝主軸線が10尺地割にのることや、出土置物の時期からみて、造営はB期までさかのぼると考えられることになった。ただし、後に南方で流路をつけかえ、C期東脇殿の雨落溝として利用した形跡があり、溝の一部はC期まで継続使用された可能性もある。

建物群の西側にもSD6608と対称の位置に南北溝の存在を予想したが、西側ではその部分が道路敷の下となって著しく削平されていたため検出できなかった。

この他B期に属する遺構としてSC6670がある。これは第二次内裏外郭北面築地回廊の南柱列の延長線上にあり、前回6間分が確認されていたものである。殆ど削平されて、柱掘り方の底に近い部分と若干の根石しか残存せず、今回は5間分の掘り方を検出しただけである。築地回廊の中心部は一条通りの道路下に存在するものと思われる。

以上B期の遺構は69次調査分と併せて、ほぼその全貌を把握することができた。SB6610、SB7150を中心として東に7棟の脇殿、北に後殿2棟を配置し、おそらく西側にも同様の脇殿を配したと予想される。これら多くの建物も、中心殿舎（SB6610、SB7150）と後殿（SB7151、SB7152）、あるいは中心殿舎と脇殿といったように、位置、規模、構造の上から、対比的にいくつかのグループとしてとらえることが可能である。また、脇殿の中でも、南側に位置し廂を有する建物（SB6660、SB6663）と後方の細殿風建物（SB6666、SB6669）、さらには中心殿舎との間に配置される2棟の建

物（SB6640, SB6650）など、機能的にも各々かなりの相違をもつものと思われる。いずれにせよ、このような建物配置は内裏地区や他の官衙地区にも現在まで類をみなかったものである。

C 期

B期に拡張した台地上をそのまま利用しているが、B期と比較して全体の規模は縮少し、配置も大幅に変更している。地割法もB期にみられた10尺方眼地割は用いていない。

この時期に比定できる遺構には建物3棟、塀6条、溝5条などがある。

SB6620はC期の正殿と考えられる建物で、今回その北面の廂部分を検出した。この建物は身舎7×3間（柱間10尺）の四面に14.5尺間の広い廂をつけたものである。北入側柱の掘り方は全体に浅く、底が鉢状にくぼんでおり、うち幾つかには礎石裾えつけ痕と思われる根石が残存する。南入側柱列でも掘り方内に河原石がサークル状に並んでいたが、北側のものに比べ、石のレベルがやや低い。SB6620には身舎部分だけ礎石を用いたとも考えられるが、あるいは部分的に根継ぎをただけかも知れない。この点については更に検討の要がある。

SB6620の東西妻柱列より内側1間めの柱筋からは塀SA7171, SA7172が北へそれぞれ7間のび（南及び北の端間12尺、他5間は9尺間）、後殿SB7170の南の隅柱につながる。この2条の塀は正殿・後殿間の内庭を区画する意味をもつものであろう。

SB7170は7×2間の身舎（10尺間）の南北両面に14尺間の廂をつけた東西棟建物である。また東西の妻柱から各々2間めの位置に間仕切りを設け、全体を3つの区画に仕切っている。このうち西側の区画内には長方形プランの土壇SK7193があり、西で石敷溝SD7195（石抜き取り痕跡を残すのみ）に、北で素掘りの溝SD7189にそれぞれつながっている。SK7193は、浅く整った掘り方で、ゴミ捨て用の土壇などとは状況を異にしている。SD7195は西から流れてSK7193にそそいであり、SD7189は土壇から北へ流れている。SD7195からとり入れた水をSK7193に溜め、SD7189で排水し

たものと思われる。この機能については明らかでないが、後殿SB7170の一面に水を取り扱う施設が附属していたことは注目される。

SB7170の東には脇殿SB6621がある。SB6621は5×2間の礎石柱身舎（桁行柱間8.5尺、梁間9尺）に掘立柱の南北両面廂（12.5尺間）をつけた東西棟建物で、南側柱通りをSB7170南面に揃えている。なおこの建物の身舎部分の柱掘り方は、東西妻柱をのぞいて布掘りとなっている。

塀SA7173は、東西塀SA6624の西端から北へ6間のびてSB6621の西妻に接続する。柱間は南5間が9尺で、SB6621との間は13.5尺と、やや広くなっており、あるいはこの部分が開口していたとも考えられる。

SB6621の北西隅柱からは、やはり塀SA7174が北へ1間のびるが、C期の北を限る東西塀SA6626との間は開口部となる。

SA6626は前回調査分の西延長上で14間（柱間10尺）検出し、さらに西へ続いている。

溝遺構には前述したものの他、SD7177、7175、6633などがある。

SD7177は、SB7170の南側雨落溝（削平されて殆ど残っていない）につながるものであり、石敷溝SD6608と交叉して東流し、SB6621の西妻から西へ10尺の位置で北に折れる。北折した溝SD7175は東西塀SA6626の北を東流するSD6633にそそぐ。おそらくこの段階に石敷溝SD6608の北半部（SD7177以北）は廃絶したと思われる。

この他C期の遺構としてSA7181、SX7182等がある。東西塀SA7181は発掘区西端で3間分検出したが、南北塀SA7172の南1間めの柱につながる。柱間は西2間が17.5尺、東の1間が12尺である。SA7180がどのような意味をもっていたかは、SX7182の性格とともに西地区の発掘にまたねばならない。

以上C期の遺構を概観すると、中軸線上に正殿SB6620・後殿SB7170を配置し、正殿の東には、北妻柱通りを正殿前面に揃えた脇殿SB6622が位置する。さらに後殿の東にも後殿と建物前面の柱通りを揃えた脇殿風建物SB6621が存在している。

この時期の遺構は、建物の配置についてはもとより、柱間寸法を広狭多様に使いわけ、また塀によって敷地をとりかこんで内部を小さく区画するなど、B期の遺構とは大きな変化を遂げている。このような建物配置は、塀の多用という点をも含めて、「第二次内裏」後官の配置に多くの共通性をもっている。

6 A B Q - C 地区

6 A B Q 地区は 6 A B P 地区の台地上建物群のすぐ前面にあたり、広い空間地を必要としたせい、遺構の数は極めて少ない。建物、塀、溝、井戸等の遺構が分散的に検出されただけである。またこの地区は台地の南裾部であり、遺構検出面のレベルにも、6 A B P 地区との間に約 3 m の差がある。

遺構は整地上の層序から大略 3 期にわけられる。A・B・C、3 期の時期区分は 6 A B P 地区でおこなった時期区分に一致する。その他、所属時期不明の遺構も若干存在する。

層位は基本的には、黄灰色粘質土の地山上に、茶褐色粘質土（整地層Ⅰ）と黄褐色粘質土（整地層Ⅱ）が重なった状態であり、各層にはそれぞれ多量のバラスが含まれている。

遺構にはこの三つの層各々から切り込んだものがみられる。

A 期

A 期には溝 SD7142 と井戸 SE7145 がある。

SD7142 は中軸線から東へ約 20 m のところを南北に走る幅 1 m 程の素掘りの溝である。地山面から切り込んでおり、北から南へ流れている。この溝は 69 次調査では検出されておらず、6 A B P 地区の遺構との関係は不明である。

発掘区東北部では井戸 SE7145 を検出した。3.5 m × 3.2 m の隅丸方形プランの掘り方をもち、深さは約 2.5 m を計る。井戸枠は残存せず、遺物もわずかに軒瓦、刀子が一点ずつ出土したに過ぎない。黄褐色粘質土と青灰色粘質土の埋め土のあり方は、短時間内に一気に埋めたような状況を示している。一応地山面で検出したものであるが、付近の整地土が削られてやや明瞭さを欠いているので、あるいは B 期に降るかも知れない。

69 次調査で検出したバラス敷遺構 SX6603（礎積段落 SX6600 の前面

にある)の延長ははっきり確認していないが、部分的にバラスの多量に分布するところがあり、おそらくこの地区も当初は全面バラスを敷いていたと思われる。

B 期

発掘区西北部で、東西2間以上(?)、南北1間の特殊な遺構SX7141を検出した。SX7141の掘り方は 3×1 mの長方形プランで、柱位置だけを一段深く掘っている。柱間は東西約6 m、南北約4 mあり、非常に広い。仮にこれを中軸線で西へ折り返すと、東西6間、約36 mと極めて長い特異な平面になる。いずれにせよこれまで平城宮でも例をみない遺構である。これがどのような性格をもつ遺構であるかについては現在のところよくわからない。

この他にはB期に比定できる遺構は認められなかった。

C 期

この時期の遺構は整地層Ⅱの面で検出されており、石敷の溝、素掘りの溝などがある。

SD7133は発掘区中央北辺で検出した南北溝である。底には河原石を敷き、側壁にも石を用いたらしく、石の抜き取り痕跡を認めた。この溝は69次調査で検出したSB6622の面側雨落溝SD6612($2^{\circ} 30'$ 程の傾斜で南下している)と同一の線上にのっている。もし拡張した台地の南端が構内道路下にまで伸び、ここでSD6612からSD7133に流下するとしても、両者の落差は1 m以上になる。

SD7133は南へ流れて素掘りの東西溝SD7132と接する。SD7132は幅50 cm程の浅い溝で、中軸線から約33 mの位置まで西流して、南北溝SD7131に流れこむ。SD7131はSD7132と同様の規模で、そのまま発掘区南端まで続いている。この他、C期に属する遺構にはSX7138がある。SX7138は、発掘区北端で、東西3.5 m、南北2 m以上の範囲に凝灰岩がまとまって分布した遺構である。凝灰岩は風化が著しく、個々の形状は明らかでない。

その他

以上3期に分けられたものの他、所属時期不明の建物、塀、瓦器を出土する

土壇等がある。

SB7140はSX7141の南に位置し、桁行6間以上、梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行9尺、梁間8尺で、掘り方も小さく貧弱なものである。方向も東で南へかなり振れている。

SB7140の東には3×2間、総柱の東西棟雑舎SB7134がある。SB7134の柱掘り方は、径20～30cmの小さなもので、柱間寸法にも幾分バラつきがみられる。これらの建物は、いずれも整地層Ⅰの面で検出したが、規模、仕事内容等からして、B、C期に属するものと考え難い。

発掘区の中央からやや南よりの位置に東西塀SA7130を検出した。柱間は10尺で、14間分検出したが、さらに東西に続くと思われる。SA7130はSX6600基底部から南へ150尺の位置にあたる。また27次調査で検出された東西塀SA3805（A期相当の時期）から北へ200尺のところにあたり、A期とすれば区切りのよい完数尺の位置にあるが、層位の関係や方向の問題（東で北へ若干振れる）からみてA期とするには疑問がある。なお、B、Cのいずれかの時期に置くことについても現在のところ積極的な根拠をもたない。

この他瓦器などを出土した土壇が二ヶ所に存在する（SK7135、SK7136）。

以上のように6ABQ地区は遺構の分布密度が極めて低く、A－C期を通じて高台の建物群前面の広場であるという基本的な性格に变りのなかったことが明らかとなった。特に、「第二次内裏」正殿地区に並び、「第一次内裏」を予想した地区であったにもかかわらず、終始「広場」としての性格をもち続けたということとは、むしろ6ABP地区がこの一帯の中心をなしていたことを物語っている。

遺物には瓦、土器などがあるが、量はさほど多くない。瓦、土器とも、SB7150の柱拔取り穴やSD7175等からまとまって出土している。

軒丸瓦は6134型式が約50%で最も多く、69次調査とやや異ったあり方をみせている。軒平瓦では69次同様、所謂東大寺式の6732型式が多い。その他、「埋」刻印平瓦が一点出土している。

土器では、SB7150の柱拔取り穴の出土資料でB期の年代をある程度おさ

えることができる。SB7150出土の土器は、SK219様式（天平宝字末年頃）とSK2113様式（宝亀末年頃）のそれぞれに共通する要素をもっているが、SK2113様式により近いといえる。これからみると、B期の造営時期は天平末年を遡らず、おそらく、天平宝字年間におかれる可能性が高い。

C期の年代を示す資料には、SD7175の出土土器がある。SD7175の土器はSE311様式（天長頃）に似た様相を示している。C期の下限が平安時代に降ることは間違いない。

このような年代観から、この地区のA期のうちに既に「第二次内裏」が成立していたことは疑いなく、両者はかなり早い段階から併存したことが明らかとなった。この地区の性格の究明が急がれるわけであるが、現在の時点では、この地区を、「中宮」、「中宮院」、あるいは「西宮」といった「内裏」と密接な関係にある場所とする蓋然性の強いことを指摘するに留めたい。

第73次調査

第73次発掘調査は、第2次内裏築地回廊の東南部分とその南にある東楼跡の土壇周辺について面積約36aを行っている。内裏内部の調査はすでに第3・9・12次等で若干行っており、内裏の正殿を始めとする建物群、築地回廊などを確認している。調査は現在進行中であり、報告では検出した遺構の概要を記述するにとどめておく。

検出した遺構は、内裏地区で東面・南面築地回廊、礎石建物1、門2、掘立柱建物6以上、柵、古墳周塹の一部である。東楼跡周辺では、礎石建物1、柵列1などを検出した。

築地回廊は、南面・東面ともすでに発掘した部分の延長で、今回は隅の部分を調査した。回廊の保存状態は南側の部分がとくに良好で、築地積土本体と寄柱礎石、叩きしめた回廊床面、側柱礎石抜取穴、凝灰岩切石の雨落溝、雨落溝と側柱礎石との間には凝灰岩切石の石敷が残っていた。東面の築地回廊では入隅から11間目のところに東の一の門が開いており、門の礎石抜取穴を築地中